



東京鶴城会便り

vol.16
2022.04

発行責任者：田中幸資

【ごあいさつ】

晩春の候 会員の皆様におかれましては、益々ご清祥のこととお慶び申し上げます。
日頃は、東京鶴城会の運営に甚大なご理解とご協力を賜りまして、誠にありがとうございます。

さて、世界的に長引く新型コロナウイルス感染症の拡大で、生活が一変しており、依然として厳しい状況が続いております。

一方で、母校・宇土高校では、昨年11月に創立百周年記念式典が開催されまして、大変喜ばしいことでございます。また、同会では、会員の櫻井正男さん（昭和31年卒）が東京オリンピックの東京都北区の聖火ランナーに選出されました。ご本人には、国際オリンピック委員会のトーマス・バッハ会長と東京オリ

ピック・パラリンピック競技大会組織委員会の橋本聖子会長の連名で、「東京2020オリンピック聖火リレー 聖火ランナー証明書」が贈られており、ご本人にとりましては、大変名誉なことであり、私もとても嬉しく思っております。

コロナ禍の厳しい状況下、2年連続で延期・中止が続いている東京鶴城会総会・懇親会ですが、今年度こそは開催が実現し、会員の皆様とお会いして、楽しいひと時を過ごしたいと強く願っております。引き続き、コロナ感染予防には十分にご留意されて、健康な毎日をお過ごしください。

東京鶴城会会長 田中幸資（昭和38年卒）

【2022年度東京鶴城会総会・懇親会の延期について】

毎年5月第4土曜日に開催しております総会・懇親会ですが、新型コロナウイルスの感染状況を鑑み、幹事会で協議の結果、本年は下記の通り延期いたします。

記

【日程】 2022年 10月 29日(土)

【場所】 銀座バグスプレイス (THE BAGUS PLACE)
東京都中央区銀座2-4-6 銀座Velvia館 地下1階
<https://www.bagus-99.com/Bplace/>

「東京鶴城会」ホームページ
<http://kakujiyoukai.com/>



聖火ランナー・櫻井正男さん(昭31年卒)の笑顔にホッコリです！

『東京鶴城会便り』(第14号/2020年5月発行)で、櫻井正男さん(昭31年卒)が「東京2020オリンピック」の聖火ランナー(東京都北区代表)に選出されたことをご紹介しましたが、ご周知のとおり、新型コロナウイルス感染拡大の影響を受けて、全国的に聖火リレーの規模縮小が行われました。

それにより、櫻井さんのお住まいの東京都北区では、公道でのランナー走行はすべて中止となり、櫻井さんの「無事に聖火ランナーとして、役目を果たしたい」の目標は、残念ながら実現できませんでした。

昨年8月末頃、櫻井さん宛に聖火ランナーのユニフォームとトーチが届き、ご本人は早速、聖火ランナーのユニホームに身を包み、記念撮影をしました。聖火リレートーチを持った聖火ランナー姿の櫻井さんの満面の笑顔(写真左下)にホッコリです。

また後日、国際オリンピック委員会(IOC)のトーマス・バッハ会長と日本オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会の橋本聖子会長の連名での、「東京2020オリンピック聖火リレー 聖火ランナー証明書」(写真下)が櫻井さんの手元に届き、ご本人は「とても光栄で嬉しいです！」と語っていました。櫻井さん、誠におめでとうございます！

事務局Sより



泉の広場で逢いましょう

東京鶴城会の多くの皆様は、故郷熊本訪問(帰省)を控えていると思います。何でもコロナのせいにはなりません、このままでは一生帰れないかもしれないので(大袈裟ですみません)、僕は延び延びになっていた帰省を4月下旬に決行することにしました。

旅の始まりは、いつものとおり宇土半島周回です。不知火町から入る右回りのルートを選択し、戸馳島、三角港に立ち寄ります。まずは不知火町の永尾劔神社です。えいのうつぎ、と発音するそうです。小学校の頃自転車で立ち寄ったことがあります。真下の海に鳥居があることでも知られていますが、加えて、神秘的な火 不知火を見る所としても有名ですね。残念ながら春は季節が違い見ることはできませんので、遠い記憶を蘇らせます。

信じて貰えなくてよいのですが、小学校5、6年の頃、僕は何度も見ました。今はネットで直ぐにほぼ何でも検索できますが、不知火に関してははっきりした情報には辿り着きません。この為自分の記憶だけが頼りなのですが、8月下旬から9月初旬頃に、松橋町の南端を流れる砂川を渡った所から不知火海に突き出て

いる干拓地から見えました。干拓地の北側の堤防から、対岸の不知火町永尾辺りの間の海上に不知火が浮かんでいました。浮かぶというよりも水上(水面)を横に移動する感じです。最初は漁火を掲げた漁船かなと思ったのですが、繰り返し何度も何度も海面を横に移動することから、摩訶不思議な感覚に襲われました。父の夜釣りに付いて行った時のことであり、尋ねると「不知火たい」と答えていましたが、父も半信半疑でした。

不知火は八朔の日(旧暦の8月1日)に現れると言われています。正体は予想どおり漁火などのようです(たまたまネットで接した情報では、干潟の冷えた水面と大気との間にできる温度差によって、遠くの少数の漁火が無数の影像を作る異常屈折現象などと解説されています)。僕が宇土高生の頃は八朔の日だけにみられる現象と言われていましたが、その前後にも現れるようですし、有明海でも見られるようです。ミステリー作家の内田康夫さんの「不知火海」という小説にも、これらのことが描写されています。自分の記憶とも整合しますが、単なる漁火だと少し物足りない気がします。✓



①永尾劔神社(昭和60年卒上原さん提供)

戸馳島経由で向かう三角港のグロテスクなピラミッド(ごめんなさい)はすっかり海に溶け込んでいますし、目の前のJR三角駅のレトロな駅舎は自分が宇土高生だった頃から大変身しています。

三角港の後は、これまで行ったことがない世界文化遺産に指定されている天草の崎津集落(下島西海岸)に向かいます。その象徴である崎津教会は「尖塔の上に十字架を掲げた重厚なゴシック様式で、その堂内は国内でも数少ない畳敷きになっている。建てられ



②三角港のピラミッド

た土地は、ハルブ神父の強い希望で、弾圧の象徴である絵踏みが行われた吉田庄屋役宅跡が選ばれた」と観光ガイドに記されています。僕の宇土高時代に教科書の題材であった遠藤周作さんの「沈黙」で描かれた400年前と同じことがあったことに思いを馳せ、姿勢を正して眺めることにします。一方で、俗物そのものの僕は、教会近くの海に浮かぶ夕日で仄かに彩られたマリア像を見たら、現世のご利益をお願いするに違いないと自覚しています。

翌日は天草灘を左側に眺めながらドライブし、今や熊本を代表する景勝地となった三角西港に向かいます。ラフカディオ・ハーンの短編「夏の日」の舞台となった浦島屋でのハーンと女将とのやりとりを思い浮かべたり、目の前に濃紺の海がある旧三角海運倉庫で自然美を堪能します。浦島伝説を織り交ぜた「夏の日」は幻想的であり、日本で言い伝えられてきた昔話を思い出さないと、本質的な意味を理解することができない小説です。なので僕にはその言わんとするところを伝えられないのですが、三角西港から長浜、住吉辺りまでの風景が散りばめられており、浦島屋を後にして宇土市に向かう行程をより魅力的なものにしてくれるのは確かです。

続いて、宇土市から天明を抜け、金峰山を海側から上り、宮本武蔵が五輪書を書いた霊巖洞のある雲巖

禅寺を訪れます。何故金峰山かと言うと、松橋町曲野出身の僕にとって自宅から見える山だからです。宮本武蔵が晩年を熊本(雲巖禅寺)で過ごしたことに、強い関心があるわけではありません。霊巖洞に至る細道には、愛嬌たっぷりの五百羅漢が座しています。人間は悟る前がいいのですね。そう思わざるを得ません。

そして熊本市内に向かう道沿いにある峠の茶屋で休憩します。そうです。あの峠の茶屋です。「山路を登りながら、こう考えた。知に働けば角が立つ。情に棹させば流される」で始まる草枕に出てくる所です。僕には難しすぎる小説ですが、その中で描かれている場所に行けば、ほんの少しは意味が分かってくるかなと期待を込めて立ち寄ります。✓



③夏の日



④雲巖禅寺の五百羅漢

3日目は当然阿蘇に向かいますが、行きたいところがありすぎて迷っています。ミルクロードは外せないなので、ここを通過して、僕にとっての未踏の地(誇張してすみません)である押戸石の丘(南小国町)に足を踏み入れますが、その後は、古閑の滝の水しぶきを浴び、月廻り公園に立ち寄り、北側ルートで高森町に入るか、九重方面まで目指すか、やはり王道の草千里にするか、といった感じです。

勿論、阿蘇のどこに宿泊するかも難問です。地震の前だったら垂玉温泉を選んでいたと思いますが、今回は、定石の黒川温泉、漱石の二百十日で描かれたかつて阿蘇の温泉の代名詞であった内牧温泉、あるいは近年人気のある南阿蘇などを考えていますが、未だに答えを見出せません。

さて、自分が10代の頃一番眩しかった場所と言えば交通センターでした。交通センターがオープンした時「東洋一のバスターミナル」と銘打たれており、流石にそれは怪しいと子供ながら感じていましたが、僕にとって一番眩しかった所であったことは間違いありません。その交通センター跡地などの一帯は、令和元年9月に「SAKURA MACHI Kumamoto」として生まれ変わっていますが、2年以上帰っていないので訪れていません。だから旅の締めはサクラマチクマモトとします。「最後のバスはもうすぐ出るのにー！」あの歌が蘇ってきますね。

(昭和53年卒 中山克美)



熊本へUターンしました！

桜の便りから慌ただしく新年度がスタートし、新緑の美しい季節となりました。

みなさんは、どんな年度替わりでしたでしょうか。

私は、2022年度は熊本で迎えました。振り返れば、こうなることは全く想像していませんでしたが、抵抗感なく現在に至っていますので、きっと進む道は間違っていないんだろうなあと思います。

私の両親は80代で、母は富合にある小規模多機能型居宅介護施設に入居しており、職員の方に温かく接して頂きながら過ごしています。父も自立型のケアハウスに入居してもらっていましたが、この度、退去し同居することにしています。

(ちなみに、父を車に乗せて病院や買い物に行くとき、父のルートどおりに行かないと「あ！ここば曲がらな

ん。は～。。まあ、よかたい。」とか「あ！今行けたのに」とか、イラっとすつとですよなあ。)

失礼しました。「介護のためのUターン」のように聞こえるかもしれませんが、どちらかという、会社でよく使う「総合的に判断のうえ」という方がしっくりする感じです。

こちらに引っ越してきて3か月が経ち、暮らしも落ち着いてきて、平日の昼間にのんびり図書館に行ったり、買い物したりすることに罪悪感もなくなりました。最近、ぐんぐん伸びる雑草と格闘しています。グランドカバーに適している植物を探し、「火の君マルシェ」と「サンサンうきっ子」をはしごして、芝桜やガザニアの苗を購入してせっせと植えています。ラベンダー、ローズマリー、バジル、ミントも植えました。楽しみ♪✓



立岡池の桜



力作！ハート型にしたつもの芝桜(右側)

Flamencoはまだ再開していませんが、雁回山や草千里にある烏帽子岳と杵島岳に登りました。見晴らしよすぎて高度感に足がすくみ、新阿蘇大橋を見たときは胸がいっぱいになりましたが、高所恐怖症もあり、車で走っているときもビビりました。首都圏では登山口まで電車やバスで移動できて便利ですが、こちらは交通機関を使って行けなくはないけど、電車とバスの連携が悪く時間がかかり、車が欠かせません。自分で運転して山に登って運転して帰るって、全部自分でやるってことか～と、とても新鮮です。

山は逃げないといいますが、残念ながら年を重ねると行ける山が限られてきますが、5月下旬の尾瀬歩きから関東遠征スターティン。今年も北アルプスを歩きたいと思います♪



杵島岳に登るよ

雁回山控えめな山頂標識



人生100年、80歳まで身体が動くとして、これからは「楽しいな、ワクワクするな」と感じられることをやっていきたいなと思います。これ、意外と難しく、なにかする、なにもしないの選択をするにもよくよすることが多く、苦行になってないか？やりたくないことをやろうとしていないか？を自身に問いかけていますが、結構よくよチーンとするタイプなこと気づきました。

最後になりましたが、神奈川在住の頃はみなさまにお世話になり、本当にありがとうございました。熊本へ帰省される際は、ぜひご連絡ください。まだまだ知らない熊本のよさを発見できる、小さな旅にご一緒できればうれしいな～と思ってます♪

(昭和58年卒 楠村佳代子)

里帰りプチ観光ツアー ～山都町天空のカフェ&おれんじ食堂の旅～

久しぶりの里帰りに、東京から仲良しの友人が同行しました。山都町の天空のカフェ「ゆずの木 ねむの木 みずたまの木」は、本当に見晴らしの良い山の上にあって、遠く阿蘇五岳を見渡せました。鳥の声を聞きながらのランチタイム、爽やかでのんびりとしたランチタイムを楽しみました。コロナ禍でうつうつとした気持ちが、洗われるようなひと時でした。

2日目は前から乗りたかった「おれんじ食堂」は、鹿児島川の川内駅から新八代駅までの3時間半91キロの観光列車の旅。途中下車して海辺を散策したり、阿久根駅では嬉しいお土産を頂いたりしました。食事は車窓から東シナ海を眺めながら、季節のスイーツに始まり、目の前の海で獲れた魚介類を使った軽食、最後は

八代海沿岸を走りながら、天草の島影に沈む夕陽を眺めながらのディナー。数々のお料理は全て沿線の海や山で採れた食材を使ったもの。ちょっと贅沢な記憶に残るプチ観光に、案内した友人も大満足してくれました。観光列車の中も素敵で、席は全部海側が良く見えるように作られています。

肥薩おれんじ鉄道は、鹿児島県のローカルの鉄道会社ですが、車内のスタッフの方にお話を聞くと、九州新幹線が走るのが決まった時に廃線にしようという話になっていたそうですが、熊本県と協議して観光列車を走らせる事になったそうです。肥薩おれんじ鉄道の社員の方々の凄い努力があり、現在の素晴らしい観光列車が誕生したそうです。✓



途中下車して海岸を散策する道も、鉄道会社の社員の皆さんの手作りだそうです。肥薩おれんじ鉄道はJR九州の列車ではありませんが、JR九州には約11個の観光列車が走ってます。どの列車も素敵です。記憶に残る思い出のページ作りに、是非お勧めの観光列車です。

おれんじ食堂も車内のスタッフの皆さんも温かく、また乗車したいと思う列車でした。

私、プロデュースのプチ観光の最後の日、宇土市の絶景ポイントに案内しました。おこしき海岸と長部田海床路の夕陽を堪能してきました。干潮の時間はちょっとずれていましたが、雲仙岳に沈む美しい夕陽を観る事ができ、友人にとっては大満足の記憶に残る旅だったようです。

(昭和47年卒 六本木祐子(旧姓 萩原))

永青文庫と肥後細川庭園

4月中旬、目白台・椿山荘近くに在ります、永青文庫と肥後細川庭園を訪れました。

永青文庫は細川家伝来の美術品や歴史資料を収蔵しており、5/8まで『戦国最強の家老—細川家を支えた重臣松井家とその至宝—』展が開催中です。
永青文庫HP : <https://www.eiseibunko.com/>

主君細川家と家老松井家にスポットを当てた展覧会で、永青文庫と松井文庫の伝来品から、時に諫言しても御家の存続を願い代々支え続けた、松井家の忠義を知ることができました。

茶の湯関連では、唐物尻膨茶入《利休尻ふくら》や、利休居士が亡くなる2週間前に初代・松井康之に宛てた手紙などが展示されていました。

こちらの手紙は、以前別の展覧会でも拝見しましたが、康之が利休に飛脚を送ったことに対する御礼と、堺への出立に、細川忠興と古田織部が見送りに来てくれたことへの驚きと感謝が記されています。✓

八代市HP:

<https://www.city.yatsushiro.lg.jp/bunka/kiji0031214/index.html>



その後、永青文庫に隣接する肥後細川庭園を散策。アヤメ科の射干(シャガ)の花が、丁度見頃を迎えていました。

まず園内に建つ松聲閣で、お庭を眺めながら御茶を一服頂きました。
御干菓子は香梅さんの『加勢以多(かせいた)』。加勢以多は17世紀に熊本藩での銘菓でしたが途絶え、現代になって復刻された御菓子です。

また受付では、フジバンビさんの『黒糖ドーナツ棒』も販売されていました。

永青文庫と肥後細川庭園は、東京にいながら熊本の歴史を感じられる穴場スポットでお勧めです。
お近くを訪れられました際は是非。

(平成9年卒 浅沼信雄)



2021年度 東京鶴城会収支報告書

2021年度 東京鶴城会収支報告書 (2021年4月1日から2022年 3月31日)

2022年 3月 31日
(単位: 円)

支出の部	金額	収入の部	金額
総会費	0	年会費(92名+寄付)	207,000
図書費(母校寄贈)	0	総会会費	0
印刷費(案内738名分等)	140,280	来賓祝儀	0
幹事会費(会場費等)	0	広告費	0
事務局費	0	利息	0
交通費	0		
通信費(切手、送料等)	65,223		
雑費(手数料等)	17,675		
(小計)	223,178	(小計)	207,000
次期繰越	109,591	前期繰越	125,769
合計	332,769	合計	332,769

次期繰越 <正味財産内訳>

・現金	1,485
・郵便貯金(通常)	108,106
合計	109,591

監査報告

2021年度会計報告につきまして、²⁰²²年4月12日 会長立会いのもと
監査を行いました結果、収支報告書、明細書、証票等、規約に則り
適切に処理されているものと認めますので、ご報告いたします。

以上

2022年4月12日

会計監査

萩原秀文 

2021年度 会費納入者内訳

2021年度 会費納入者			
卒業年度	人数	卒業年度	人数
S23年	1名	S47年	1名
S24年	2名	S48年	2名
S25年	1名	S50年	7名
S27年	2名	S51年	2名
S31年	4名	S53年	3名
S34年	2名	S54年	2名
S35年	1名	S55年	4名
S37年	3名	S56年	1名
S38年	5名	S57年	1名
S39年	3名	S58年	3名
S40年	6名	S60年	2名
S41年	2名	S63年	1名
S42年	8名	H2年	1名
S43年	7名	H4年	1名
S44年	3名	H6年	1名
S45年	4名	H9年	1名
S46年	5名	計	92名

— 皆様のご理解とご協力に、深く感謝申し上げます —

◇編集後記◇

まぶしい新緑と薫風を感じる季節になりましたが、皆様いかがお過ごしでしょうか？

総会・懇親会は、新型コロナウイルスの感染状況を鑑み、再びの延期が決まりました。10月皆様にお目に掛かれますことを願っております。

また、皆様のお力添えにより、今年も東京鶴城会便りを無事発行することができました。有り難うございます。

これから少しずつ暑くなりますが、どうぞご自愛の上お過ごしください。

(平成9年卒 浅沼信雄)